

ニュース

アピセラピー学術講演会

第10回アピセラピー学術講演会（プロポリス研究者協会主催，日本アピセラピー研究会共催）が，2006年11月18日，名古屋市内で開催された。本号にプロポリス関連の記事を提供して下さったエジプト国立研究センターのヘガシー教授も，この講演会での二つの講演のために来日。演題と講演者は以下の通り。

「エジプトのプロポリス—その化学組成と生物活性」アフメッドG.ヘガシー（エジプト国立研究センター），「沖縄産プロポリスに含まれるプレニルフラボノイド」熊澤茂則（静岡県立大学），「主成分分析から見たプロポリスの化学的多様性」中村 純（玉川大学），「プロポリス抗癌性化合物の創製」三島敏（アピ株式会社），「プロポリスによる腫瘍血管新生抑制活性」安木蓮（静岡県立大学），「古代エジプトの養蜂」ヘガシー。参加者は約50名。

ヘガシー教授は，免疫学などが本来の専門ながら，プロポリスの研究者としても第一人者となっている。今回の講演でも紹介しきれない膨大な量のデータを持参され，短い時間に広範な内容を紹介された。

なお，今回の来日では，講演会が主目的ではあったが，玉川大学のほか，アピ（株）長良川リサーチセンターと（株）山田養蜂場などを表敬訪問した後，帰国された。



アピ（株）長良川リサーチセンターを訪れたヘガシー教授

島根県養蜂協会 50周年

2006年10月17日島根県養蜂協会の創立50周年記念式典が松江市内で開催された。中国地方では最大多数の会員数を誇る同協会も，クマの被害などに直面し多くの問題を抱える現状ながら，当日は，多数の会員が集まって記念すべき日を祝った。森会長のあいさつに続き，7名の功労者の顕彰のあと，当施設中村主任が「これからの養蜂を考える—薬剤残留のないハチミツ生産を目指して」と題して講演した。



編集後記 今号は，プロポリス特集号として，海外のプロポリス研究の第一人者から3題の論文を寄稿していただき，掲載することができた。特に，表紙に連動した「レッドプロポリス」に関しては，十分な情報が得られたことと思う。ブラジルのPark先生からは「ミツバチ科学」のために投稿していただいたもの，ブルガリアのBankoba博士は次号で参加記を掲載予定の国際会議APIMEDICAの講演原稿から，またエジプトのHegazi教授にはプロポリス研究者協会のアピセラピー学術講演会の講演原稿から，この特集号のために寄稿いただいた。レッドプロポリスは，国内でも研究や商品化が進められているが，その赤い特異な見かけからも，プロポリスが起源植物によって非常に多様で，効果も多彩であり得ることを，私たちに再認識させることに貢献しているとは考えられないだろうか。

フィジーの奮戦記は，養蜂の専門家ではない著者が，ミツバチの巣箱を設計し，工場を作り，養蜂産業を助けようとする，まさに奮戦模様がよく伝わる。その後政変などもあり，先行きはわからないが，いつかフィジーに寄る機会があれば，Made in Fijiの巣箱を見たい。（純）